朝阳老城北大街出土的3～6世纪莲花瓦当初探

万雄飞　白宝玉

一　前　言

2003～2004年，辽宁省文物考古研究所在朝阳老城北大街进行了大规模的考古发掘，取得重大收获[1]。第III发掘区龙城宫城南门遗址的发现证实了三燕国都龙城的具体位置，具有重要的学术价值，被评为2004年全国十大考古新发现。朝阳老城北大街考古发掘出土了丰富的遗物，尤为值得关注的是一批年代在3～6世纪的莲花瓦当，它们形制较为独特，有的为国内所仅见，对于探讨莲花瓦当的起源及其早期的演变有重要价值。目前朝阳老城北大街的发掘工作还在进行之中，大部分资料尚未整理发表，本文仅对这一批莲花瓦当予以介绍和初步研究。

二　莲花瓦当的类型

朝阳老城北大街出土的瓦当种类多样，有莲花瓦当、文字瓦当和兽面瓦当，年代跨度从十六国到金元时期。下面仅对年代在3～6世纪的莲花瓦当予以介绍，目前所出土的这类瓦当一共分为5型。

（一）A型

分为两个亚型。其总体特征是泥质灰陶，高边轮，边轮高出当面约2厘米。当面被双或三直界格线均分成4个扇面，其内各饰1瓣莲纹，莲瓣呈浮雕状凸出于当面，瓣形较瘦长，近似枣核。当心为一凸起的圆乳钉，莲瓣与边轮之间饰一道粗凸弦纹。

Aa型　当面界格线为三直线，圆乳钉外饰一周凸弦纹，与界格线相接。出土多件，形制大小基本相同。有的在当心的圆乳钉上涂红彩，有的圆乳钉和凸起的莲瓣上有不规则的压痕。

标本(04CL管线沟采：2）完整，边轮宽2.2、当径19厘米(图版十八，1)。

Ab型　当面界格线为双直线，仅一件。

标本(04CLVH14：6）　基本完整，边轮小部残缺，当面涂有白灰(图版十八，2)。

（二）B型

分两个亚型。其总体特征是泥质灰陶，高边轮，边轮高出当面1.8厘米。当面饰6瓣莲花，莲瓣呈浮雕状凸出于当面，瓣形较瘦长，近似枣核。莲瓣之间饰繁密的交错直线几何纹。当心

为一凸起的圆乳钉。莲瓣与边轮之间饰一道粗凸弦纹。

Ba型　仅1件。

标本(04CLV③: 3)　边轮高而窄，莲瓣较大，莲瓣的两端分别与边轮内的粗凸弦纹和圆乳钉外的凸弦纹相接。莲瓣之间的直线几何纹较简洁、清晰。圆乳钉呈圆锥状，素面。边轮宽0.5、当径16厘米(图版十八，3)。

Bb型 仅1件。

标本(04CLVH4: 6)　莲瓣短小，莲瓣之间的直线几何纹较复杂，略显零乱，有三条直线穿过圆乳钉并在乳钉的中心相交，把圆乳钉等分成6部分。边轮缺失，当面残径14厘米(图版十八，4)。

(三) C型

仅1件。

标本(04CLV③: 21)　泥质灰陶，边轮全部残缺，中间当面完整。当面饰双层8瓣莲花，第一层莲瓣呈浮雕状凸出于当面，瓣形较肥硕，第二层莲瓣略高于当面。当面构图饱满，留出的空地很少。当心为圆乳钉，外缘有一周凸弦纹，其外又有一周凹槽。当面残径11.5、凹槽直径3.5厘米(图版十八，5)。

(四) D型

分为两个亚型。其总体特征是泥质灰陶，边轮低平，当面饰8瓣莲花，莲花纹与边轮持平或略高，瓣形较瘦小，莲瓣之间分隔线顶端呈倒弧线三角形，当心呈莲蓬状。边轮与莲花之间饰一道凹弦纹。

Da型

标本(04CLVI排: 65)　完整，当心呈圆饼状，其上饰7粒莲籽。当径13、边轮宽1.7厘米(图版十八，6)。

Db型

标本(04CLIVH13: 9)　边轮略残，当心为圆乳钉，其外围饰9粒莲籽。当径14、边轮宽2厘米(图版十九，1)。

(五) E型

其特征是泥质灰陶，边轮低平，当面饰8～9瓣莲花，莲花纹明显高于边轮，瓣形较瘦小，莲瓣之间分隔线顶端呈倒弧线三角形，当心呈莲蓬状。边轮与莲花之间饰一道凸弦纹。

标本(04CLIVH11: 38)　完整，当心为凸起的圆饼状，其上饰数枚莲籽。当径13、边轮宽1.9厘米(图版十九，2)。

三　瓦当的年代问题

这批莲花瓦当虽然都是考古发掘出土并有明确的出土地点和层位，但是它们绝大多数出土

于隋唐或更晚的地层和遗迹单位，且以灰坑中出土居多。在这两年的考古发掘过程中我们发现一个现象，即揭露出来的三燕和北朝时期的遗迹很少，三燕和北朝时期遗迹中出土的瓦当等重要遗物更少。原因是朝阳古城延续使用时间长，而且城市多次遭到战争毁坏，后期重建时不可避免地要对前期遗迹和地层造成扰动和破坏。因此，结合朝阳城市发展史曲折复杂的实际情况，不能由于这些莲花瓦当出土于较晚期的地层就判定其年代为隋唐时期或更晚。

由于地层学的方法在此不能解决问题，可以尝试使用类型学和类比法来对上述瓦当的年代进行推断。具体做法是找出这一时期(3～6世纪)莲花瓦当发展演变的一般规律，先对它们进行类型学排列，然后再与其他地区出土的形制近似、年代明确的瓦当进行类比，进而判断其具体年代。3～6世纪是莲花瓦当开始出现并逐渐盛行的时期，目前这一时期出土的莲花瓦当资料主要有中原、南方和东北三地。中原地区(实际是指北魏政权统辖区)材料比较集中的出土于汉魏洛阳城，有学者已对这里出土的莲花瓦当进行了深入的研究[2]。共分为5型9式，其发展演变规律为："当心由受汉晋云纹图案瓦当影响的凸圆乳钉状莲花花蕊演变为当心较平的莲蓬状；当面莲花花瓣由双瓣变为单瓣；花瓣形状由较肥硕向越来越窄尖发展；花瓣数量愈来愈多"。高句丽与朝阳毗邻，在十六国和北朝时期与辽西地区联系十分紧密，文化交流的实例也很多，因此高句丽莲花瓦当的演变规律更具有类比性和可借鉴性。高句丽3～6世纪的莲花瓦当集中出土于集安高句丽王陵[3]、国内城[4]和丸都山城[5]，但是出土数量最多、年代最明确的还是集安高句丽王陵。有三座王陵出土了莲花瓦当，分别是千秋墓、太王陵和将军坟。千秋墓为高句丽第十八世故国壤王陵，修建年代在391年之后，出土了卷云纹瓦当和六瓣莲花瓦当(图版十九,3)，其中莲花瓦当占大多数；太王陵为第十九世好太王陵，修建年代在391～414年间，出土瓦当以六瓣莲花瓦当为主，兼有少量八瓣莲花瓦当；将军坟为第二十世长寿王陵，修建年代为412～427年间，出土瓦当只有八瓣莲花瓦当一种(图版十九，4)。修建年代在千秋墓之前的西大墓、禹山992号墓、麻线2100号墓等均只出土卷云纹瓦当。可以看出，高句丽在王陵建筑上使用莲花瓦当始于千秋墓，莲花瓦当的演变基本趋势是：莲瓣数量由少变多。

通过以上的分析可知，"莲瓣数量愈来愈多"和"当心由圆乳丁变为莲蓬式"是这一时期莲花瓦当演变的基本规律。根据这两条规律，对本文所述的五种莲花瓦当进行类型学的排列，其早晚顺序应依次为A型、B型、C型、D型和E型。

这五种瓦当中，D型和E型形制和当面纹饰较为接近，因此它们的年代应当同时或相差不远。Da型与汉魏洛阳城出土的第XII型A式莲花瓦当[6]形制十分相似，应同属北魏时期。E型瓦当则出土于龙城宫城南门遗址三燕门道地面之上、北魏封堵两侧门道的夯土之下[7]，年代较明确，也属北魏时期。

目前还找不到与A、B、C三型莲花瓦当形制相同的可与之进行类比的资料[8]。A、B、C三型莲花瓦当的基本特征是边轮较高(C型瓦当的边轮虽然缺失，但从残存的模制当面背面的接痕观察，也应为高边轮)，莲瓣为单瓣高浮雕状，当心是圆球状乳丁。D、E两型北魏瓦当的特征是边轮低平，莲瓣略高于边轮或与之持平，当心为莲蓬状。这两类瓦当摆放在一起，区别明显，两者之间应

存在着时代上的差别。从莲花瓦当演变规律来看，前者早于后者，即A、B、C三型瓦当的年代应早于北魏时期。

推断A、B、C三型瓦当的具体年代，还应结合朝阳古城城市发展史来考虑。朝阳古城始建于十六国前燕公元341年，397～407年后燕慕容熙对龙城进行了大规模的维修和扩建。436年北燕灭亡，高句丽军队纵火焚毁龙城宫殿，大火一旬不灭。北魏在龙城废墟上先置龙城镇，后置营州昌黎郡，北魏熙平二年(517)，朝阳古城才得以再次大规模修筑。此后，朝阳古城没有遭到严重的破坏，再下一次重建要到唐开元五年(717)。从341年龙城始建到北魏时期，朝阳古城的大规模筑城活动主要有前燕、后燕和北魏熙平二年三次。前文已论述D、E两型瓦当的年代为北魏时期，那么年代早于它们的A、B、C三型莲花瓦当应属前燕或后燕时期瓦当。

四　余　论

A型和C型莲花瓦当为朝阳地区所仅见，在其他地区未出土相同的、可以用来类比的瓦当，B型莲花瓦当虽在北票金岭寺建筑址出土过，但该建筑址的年代尚无定论。然而A、B、C三型瓦当也不是完全孤立、凭空出现的文化因素，通过对其特征进行仔细分析，可以找到其文化因子的来龙去脉。

A、B、C三型莲花瓦当承袭了汉晋瓦当形制上的一些基本特征，A型瓦当继承汉晋瓦当的特点尤为明显。汉晋时期主要流行云纹瓦当和文字瓦当，这两类瓦当当面的主体纹饰和象征意义完全不同，但是瓦当的形制却基本相同，即都具有高边轮、当心为凸起圆乳丁和当面用直界格线四等分的基本特征。这三个基本特征包括了边轮、当面和当心，构成了瓦当的基本外形。观察A、B、C三型莲花瓦当，三者都具备高边轮和当心为球状圆乳丁这两个特征，A型瓦当同时还具备第三个特征，因此从外形上看，这三型瓦当与汉晋瓦当有很多相似之处。由此可见，A、B、C三型莲花瓦当与汉晋瓦当有着紧密的联系。

一个新事物或新文化因素在出现之初，必然要或多或少地保留一些旧事物或旧文化因素的特征。从这个角度分析，A型瓦当正是由文字瓦当和云纹瓦当向莲花瓦当过渡的过渡类型，是莲花瓦当的原始型。东晋十六国是佛教在我国迅猛发展并逐渐在民间广泛流传的时期，伴着佛教的日益盛行，莲花瓦当开始出现并逐渐取代汉晋时期的云纹、文字瓦当，成为最为流行的一种瓦当类型。目前还难以指出何时何地最先出现了莲花瓦当，但可以肯定的是莲花瓦当作为一种新生事物，在它出现之初也必然要保留一些原有瓦当的特点。观察A型莲花瓦当可以发现，汉晋瓦当在形制上的三个基本特它都完全具备，与汉晋瓦当相较，A型莲花瓦当只是在当面四分界格线内的主体纹饰与它们不同，如果把四分界格线内的莲纹换成卷云纹或文字，那么它几乎与汉晋时期流行的瓦当完全一样(图版十九，5)，可以这样说，A型莲花瓦当正是从汉晋瓦当中脱胎换骨而来。隋唐是莲花瓦当完全成熟和鼎盛的时期，这一时期的莲花瓦当构图饱满、纹饰繁缛，A型莲花瓦当与之相比，纹饰显得简洁而单调，两者的差异十分明显，这种巨大的差

异从另二个角度反映出了A型莲花瓦当的原始性。

探寻A、B、C三型莲花瓦当的渊源，可以知道它们与汉晋瓦当有着密切的关系；追索A、B、C三型莲花瓦当的发展流变，可以发现它们与高句丽乃至渤海莲花瓦当也有着千丝万缕的联系。

前文已归纳了A、B、C三型莲花瓦当的基本特征，这些特征在高句丽及渤海出土的莲花瓦当中得到了继承和发展。高句丽出土的莲花瓦当[9]，有六瓣、八瓣、九瓣和是否带直界格线等之分，但无论哪一种莲花瓦当，都具有高边轮、高浮雕单莲瓣和圆球状乳丁三个基本特征。尤其是年代较早的高句丽莲花瓦当，如千秋墓中出土的六瓣莲纹瓦当，边轮较高，单瓣高高凸出于当面，莲瓣之间用双直线界格，当心为显著的圆乳丁。这些造型与A型莲花瓦当极为相似，可以看出高句丽早期莲花瓦当受到了A型瓦当的强烈影响。

渤海莲花瓦当形制多样并有着自己的民族特色，与A、B、C三型莲花瓦当及高句丽莲花瓦当差异很明显，但是它们仍然具有高边轮、当心为圆乳丁及高浮雕莲瓣的特征。以渤海上京龙泉府宫城[10]内出土的莲花瓦当为例，它们一般多为高边轮，当心为圆乳钉。尽管一些瓦当由于受到中原和南方地区开始流行的莲蓬式当心的影响，已在圆乳钉周围加饰一些象征莲籽的小圆点，但当心大而凸起的圆乳钉始终没有被取代(图版十九，6)。渤海莲花瓦当与三燕及高句丽莲花瓦当相比，最大的变化是莲瓣由单瓣变为双瓣，但是莲瓣高高凸起、莲瓣之间留有较多空地以凸显莲瓣的传统做法仍然保留下来。这一设计思想以及产生的高浮雕的艺术效果与三燕和高句丽莲花瓦当完全一致，反映了三者之间在莲花瓦当造型艺术上一脉相承的风格。反观中原及南方地区出土的莲花瓦当[11]，这种高边轮、高圆乳丁、高浮雕莲瓣的莲花瓦当，则从来没有出现过。

通过以上的分析，我们可以发现东北地区与中原及南方地区莲花瓦当的演进历程不尽相同，中原和南方莲花瓦当在各自的演进过程中相互影响、相互融合，最终形成了隋唐时期莲花瓦当的主流造型，而东北地区的莲花瓦当，从三燕到高句丽再到渤海为一脉相承，走了一条不同的发展道路，始终保持着自己的区域特色，成为我国古代瓦当艺术中的一株奇葩。

注　释

[1] 田立坤、万雄飞、白宝玉:《朝阳市老城区发现十六国至辽金元时期重要遗迹》,《中国文物报》，2004年2月11日；白万田:《辽宁朝阳老城区考古又有重要收获》,《中国文物报》，2004年11月12日。

[2] 钱国祥:《汉魏洛阳城出土瓦当的分期与研究》,《考古》1996年10期。

[3] 吉林省文物考古研究所等:《集安高句丽王陵》，文物出版社，2004年。

[4] 吉林省文物考古研究所等:《国内城》，文物出版社，2004年。

[5] 吉林省文物考古研究所等:《丸都山城》，文物出版社，2004年。

[6] 同[2]。

[7] 田立坤、万雄飞、白宝玉:《朝阳老城北大街内城城门发掘报告》，待刊。
[8] 朝阳北票金岭寺建筑址出土了与B型完全相同的莲花瓦当，但该建筑址的年代尚无定论。辛岩、付兴胜:《金岭寺魏晋建筑群址为研究三燕文化提供重要线索》,《中国文物报》2001年1月31日。
[9] 林至德、耿铁华:《集安出土的高句丽瓦当及其年代》,《考古》1985年7期。
[10] 黑龙江省文物考古研究所等:《渤海国上京龙泉府宫城第二宫殿遗址发掘简报》,《文物》2000年11期;黑龙江省文物考古研究所等:《黑龙江宁安市渤海上京龙泉府宫城第三宫殿遗址发掘简报》,《考古》2003年2期。
[11] 贺云翱:《南京出土六朝瓦当初探》,《东南文化》2003年1期。

朝陽古城北大街で出土した
3～6世紀の蓮華文瓦当の基礎的研究

万雄飛・白宝玉

1　はじめに

2003年～2004年、遼寧省文物考古研究所は朝陽古城北大街で大規模な発掘を行い、大きな成果を得た[1]。第Ⅲ発掘調査区の龍城宮城南門遺跡の発見は、三燕の国都・龍城の具体的な位置を証明し、この点で重要な学術的価値を持っており、2004年全国十大考古新発見にも選ばれている。朝陽古城北大街の発掘調査によって数多くの遺物が出土したが、特に注目されるのは、3～6世紀の蓮華文瓦当である。独特な形や作りをしており、国内であまり例の見られないものもある。これらは、蓮華文瓦当の起源やその初期の段階の変遷を探る上で重要な価値がある。朝陽古城北大街における発掘作業は今も進行中であり、大部分の資料はまだ未整理で、発表していない。本文は、これらの蓮華文瓦当についての紹介と基礎的な研究を行うものである。

2　蓮華文瓦当の型式

朝陽古城北大街で出土した瓦当には、蓮華文瓦当、文字瓦当、獣面文瓦当など、多くの種類があり、その年代の幅は十六国時代から金・元時代にわたっている。以下、3～6世紀の時期の蓮華文瓦当を紹介し、現在出土しているこれらの瓦当を5型式に分類する。

（1）A型

2型式に細分される。全体的な特徴は、泥質灰陶で外縁は高く、瓦当面より約2cm高い。瓦当面は二重または三重の直線の界線によって4つの扇形に等分され、その中にそれぞれ1葉の蓮弁を配している。蓮弁は瓦当面から浮き彫りのように隆起しており、その形状は細長く、ナツメの種子のようである。中房は円形で盛り上がっており、蓮弁と外縁の間には1本の太い凸圏線が巡っている。

Aa型　瓦当面の界線は三重の直線で、中房の周囲には凸圏線が巡り、界線と接している。出土数は多いが、その形や作り、大きさは基本的に同じである。中房が赤く彩られているものや、中房と隆起した蓮弁の上に不規則な圧痕が見られるものもある。

標本（04CL管線溝採集：2）　完形である。外縁幅は2.2cm、瓦当面径は19cm（図版18-1）。

Ab型　瓦当面の界線が二重の直線であり、1例しかない。

標本（04CLVH14：6）　ほぼ完形である。外縁のごく一部が欠失しており、瓦当面に石灰が塗られている（図版18-2）。

（２）B型

２型式に細分される。全体的な特徴は、泥質灰陶で外縁は高く、瓦当面より約1.8cm高い。瓦当面は六弁の蓮華文で飾り、蓮弁は瓦当面から浮き彫りのように隆起しており、その形状は比較的細長く、ナツメの種子のようである。蓮弁の間は細かく交錯した直線幾何文様で飾る。中房は円形で盛り上がっている。蓮弁と外縁の間には１本の太い凸圏線が巡っている。

Ba型：１例のみ。

標本（04CLV③：３）　外縁は高くて幅が狭く、蓮弁は比較的大きい。蓮弁の両端は、それぞれ外縁内側の太い凸圏線と中房を巡る凸圏線に接している。蓮弁間の直線幾何文様は、簡素で明瞭である。中房は円錐状で、文様はない。外縁幅は0.5cm、瓦当面径は16cm（図版18-３）。

Bb型：１例のみ。

標本（04CLVH4：６）　蓮弁は短小である。蓮弁間の直線幾何文様は少し複雑で、またやや乱れている。３本の直線が中房を通り、その中心で互いに交わっており、中房を６等分している。外縁部が欠失しており、瓦当面残存径は14cmである（図版18-４）。

（３）C型

１点のみ。

標本（04CLV③：21）　泥質灰陶で、外縁部はすべて欠けているが、内側の瓦当面は完存している。瓦当面は上下２層からなる八葉の蓮華で飾り、上層の蓮弁は浮き彫りのように瓦当面から盛り上がり、部厚くて大きい。下層の蓮弁は高さが瓦当面とあまり変わらない程度である。瓦当面一面に図柄が広がり、空白の部分はほとんどない。瓦当の中心に中房があり、その外周を凸圏線が巡り、さらにその外側を溝状の圏線が巡っている。瓦当面残存径は11.5cm、溝状圏線径は3.5cm（図版18-５）。

（４）D型

２型式に細分される。全体的な特徴は、泥質灰陶で、外縁部は低く平らで、瓦当面は八葉の蓮華で飾り、蓮華文は外縁部と同じ高さか、やや高い程度であり、蓮弁は薄く小さい。蓮弁間を隔てる間弁は逆三角形（楔形）で、中房は蓮の花托のようである。外縁と蓮華の間には１条の溝状の圏線がある。

Da型

標本（04CLVI列：65）　完形であり、中房は円盤状で、７個の蓮子がある。瓦当面径は13cm、外縁幅は1.7cm（図版18-６）。

Db型

標本（04CLIVH13：９）　外縁部が少し欠けている。中房は円形で盛り上がり、その外側を９個の蓮子が囲んでいる。瓦当面径は14cm、外縁幅は２cm（図版19-１）。

（５）E型

この型の特徴は、泥質灰陶、外縁は低く平らで、瓦当面は八葉か九葉の蓮華文で飾る。蓮華文は明らかに外縁より高く、蓮弁は比較的細くて小さい。蓮弁間を隔てる間弁は逆三角形（楔形）で、中房は蓮の花托のようである。外縁と蓮華の間を１本の凸圏線が巡る。

標本（04CLIVH11：38）　完形で、中房は突出した円盤状で、いくつかの蓮子がある。瓦当面径は

13cm、外縁幅は1.9cm（図版19-2）。

3　瓦当の年代に関する問題

この蓮華文瓦当は、すべて発掘調査により出土したもので、出土地点や層位の関係も明確であるが、それらの大多数は隋・唐時代またはそれ以降の地層や遺構から出土したもので、しかも、土坑からの出土が最も多い。この２年にわたる発掘調査の過程で、我々はあることに気づいた。すなわち、検出された三燕時代と北朝時代の遺構は大変少なく、三燕・北朝時代の遺構から出土する瓦当などの重要な遺物は更に少ない、という点である。それは、朝陽古城が長期間にわたって使われ続けたうえ、度重なる戦乱で破壊され、その後に再建する時に、前の時期の遺構や地層を撹乱・破壊せざるをえなかったからである。そのため、朝陽という都市の発展の歴史や複雑な実際の状況を考え合わせると、この蓮華文瓦当が比較的新しい時代の地層から出土したということで、その年代を隋・唐またはそれ以降の時代であると判断することはできない。

ここでは、層位学的な方法による問題解決が図れないので、型式学と類比法によって上述した瓦当の年代を推測することができる。具体的な方法は、この時期（３～６世紀）に蓮華文瓦当が遂げた発展と変遷の一定の規則性を見出し、まずそれらを型式学的に配列してから、他の地区で出土した形状や作りが似通った、そして年代も明らかな瓦当と類比を行って、その具体的な年代を判断するのである。３～６世紀は、蓮華文瓦当が出現し始め、次第に普及していった時代である。今のところ、この時期における蓮華文瓦当の資料は、主に中原、南方、東北の三地域で出土している。中原地方（実際には北魏政権が統治していた地域を指す）では、漢・魏洛陽城から集中的に比較対象となる資料が出土しており、そこで出土した蓮華文瓦当については、すでに、詳細な研究[2]がなされている。中原地方の蓮華文瓦当は、５型・９式に分類され、その発展と変遷の規則性については、「中房は、漢・晋時代の雲文瓦当の影響を受けた円形の盛り上がった蓮華の花芯が、比較的平らな蓮の花托のような中房へと変遷する。瓦当面の蓮華の蓮弁は、複弁から単弁に変わる。花弁の形状は、比較的肥厚なものから、次第に細く尖ったものになる。花弁の数は、次第に増加する」としている。朝陽に隣接する高句麗は、十六国・北朝の時代には遼西地区と密接な関係をもち、文化交流をした実例も数多い。そのため、高句麗における蓮華文瓦当が遂げた変遷の規則性には、類比して参考とする価値が充分にある。３～６世紀における高句麗の蓮華文瓦当は、集安の高句麗王陵[3]、国内城[4]、丸都山城[5]に集中して出土しており、そのうち最も数多く出土し、年代が最も明確なのは、やはり集安の高句麗王陵である。千秋墓、太王陵、将軍塚の３基の王陵から蓮華文瓦当が出土した。千秋墓は高句麗第18代の故国壌王の陵墓で、造営年代は西暦391年以降である。巻雲文瓦当と六弁蓮華文瓦当（図版19-3）が出土したが、蓮華文瓦当が大多数を占める。太王陵は第19代好太王の陵墓で、造営年代は西暦391年から414年の間である。出土した瓦当は六弁蓮華文がほとんどで、八弁蓮華文瓦当も少し見られる。将軍塚は第20代長寿王の陵墓で、造営年代は西暦412年から427年の間である。出土した瓦当は八弁蓮華文瓦当（図版19-4）一種類だけである。造営年代が千秋墓より古い西大墓、禹山992号墓、麻線2100号墓などでは、巻雲文瓦当しか出土していない。高句麗では王陵の造営に蓮華文瓦当を使用するのは千秋墓からと見ることができ、また、蓮華文瓦当が変遷していく基本的な傾向としては、蓮弁数の増加があげられる。

以上のような分析から、「蓮華の蓮弁が次第に増えていくこと」と「瓦当面の中央が盛り上がった円

形から蓮の花托のような中房に変わっていくこと」が、この時代の蓮華文瓦当の変遷の基本的法則であることがわかる。こうした二つの法則に基づき、本文で取り上げた５種類の蓮華文瓦当を型式学的に配列すると、時代の古いものからA型、Ｂ型、C型、D型、E型の順になる。

この５種類の瓦当のうち、D型とE型は、形状や作りと瓦当面の文様が比較的似通っているため、それらの年代は同時期か、あまり違わない時期であろう。Da型は、漢・魏の洛陽城から出土した第ＸⅡ型A式蓮華文瓦当[6]と形状や作りがかなり似ているので、それと同じく北魏時代とすべきである。E型の瓦当は、龍城宮城南門遺跡において、三燕時代に設けられた門道の地面上で、かつ北魏時代に両側の門道を封じる版築土の下から出土[7]しているため、年代は比較的明らかで、やはり北魏時代に属している。

現在、Ａ・Ｂ・Ｃ ３型式の蓮華文瓦当と形状や作りが同じで、これらと類比できる資料[8]はまだ見つかっていない。Ａ・Ｂ・Ｃ ３型式の蓮華文瓦当の基本的な特徴は、外縁部が比較的高く（C型瓦当の外縁は欠失しているが、残存している笵作りによる瓦当面の背面の接合痕跡を観察すると、やはり外縁が高かったと思われる）、蓮弁は単弁で、高く浮き出ており、瓦当中心の中房が円球状である。D型、E型の北魏時代の瓦当に見られる特徴は、外縁が低平で、蓮弁が外縁部よりもやや高いか同じ高さで、瓦当中心部は蓮の花托状の中房である。これら２系統の瓦当を並べて見ると、その違いははっきりしており、両者の間には時代の上で隔たりがある。蓮華文瓦当の変遷の法則によれば、前者は後者より古い、つまり、Ａ・Ｂ・C型の瓦当の年代は北魏時代より古い。

Ａ・Ｂ・Ｃ ３型式の具体的な年代を推定するには、朝陽古城の都市発展の歴史を考慮する必要があろう。朝陽古城は、十六国前燕時代の西暦341年に築城が始まり、西暦397年から407年にかけて、後燕の慕容熙が龍城の大規模な補修と拡張を行っている。西暦436年、北燕が滅亡する際、高句麗軍が龍城の宮殿を焼き払って破壊し、その火は10日以上も燃え続けた。北魏は、廃墟となった龍城にまず龍城鎮を置き、その後に営州昌黎郡を設置した。北魏の熙平２年（西暦517年）に、ようやく朝陽古城の大規模な補修が行われた。以後、朝陽古城は大きな破壊を免れ、次の再建は唐の開元５年（西暦717年）であった。西暦341年に龍城の築城が始まってから北魏時代に至るまで、朝陽古城の大規模な築城活動は、主に前燕時代、後燕時代、北魏の熙平２年の３回にわたって行われた。前述した通り、D型とE型の瓦当の年代は北魏時代であるから、これらより年代が古いＡ・Ｂ・Ｃ ３型式の蓮華文瓦当は、前燕あるいは後燕の時代になるであろう。

4　おわりに

A型とC型の蓮華文瓦当は、朝陽地区であまり見られず、他の地区においても、同じような類比に使える瓦当は出土していない。B型の蓮華文瓦当は、北票の金嶺寺建築遺構で出土してはいるが、この建築遺構の年代は定かではない。Ａ・Ｂ・Ｃ ３型式の瓦当も、決して完全に孤立した、根拠もなく出現した文化要素ではない。しかし、その特徴を詳細に分析すれば、その文化要素の経緯を探し出すことができるはずである。

Ａ・Ｂ・Ｃ ３型式の蓮華文瓦当は、漢・晋時代の瓦当がもつ形状や作りの基本的な特徴を一部継承している。A型瓦当は漢・晋時代における瓦当の特徴をとりわけ明瞭に受け継いでいる。漢・晋時代に、主として流行した雲文瓦当と文字瓦当の２種類の瓦当は、瓦当面の主文様や象徴する意味は全く違っているが、瓦当の基本的な形状や作りは、基本的に同じである。すなわち、いずれも外縁部が高く、瓦当

の中心部には円形の盛り上がった中房があり、瓦当面は直線の界線により４分割されるという基本的な特徴がある。外縁部・中房・瓦当面を含む、これら３つの基本的な特徴が、瓦当の基本的な外形を構成するのである。Ａ・Ｂ・Ｃ ３型式の蓮華文瓦当を観察すると、いずれも高い外縁、瓦当中心部の円形半球状の中房という二つの特徴を備えており、さらにA型瓦当は、第三の特徴も備えている。したがって、瓦当の外形に着目すると、これら３型の瓦当は、漢・晋時代の瓦当との類似点を数多く有する。このように、Ａ・Ｂ・Ｃ ３型式の蓮華文瓦当は、漢・晋時代の瓦当と密接に関係していることが分る。

一つの新しい物や文化要素が出現した当初は、必然的に多かれ少なかれ、古い物の一部や文化要素の特徴を残しているものである。こうした観点から分析すると、A型瓦当は、文字瓦当・雲文瓦当から蓮華文瓦当への過渡的型式であり、また、蓮華文瓦当の原型である。東晋・十六国時代は、わが国で仏教が急速に発展し、民間に広く流布した時代である。仏教が日増しに隆盛するのに伴って、蓮華文瓦当が出現し、次第に漢・晋時代の雲文瓦当や文字瓦当に取って代わり、その時代で最も広く使用される瓦当の型式となった。今のところ、蓮華文瓦当が出現した時期や地域を指摘するのは難しいが、蓮華文瓦当が新たに生まれものであり、出現した当初にも、必然的にもとの瓦当の特徴をいくつか留めたことは間違いないであろう。A型蓮華文瓦当を観察すると、漢・晋時代の瓦当がもつ形状や作りの３つの基本的な特徴を、すべて完全に備えていることがわかる。漢・晋時代の瓦当と比較すると、A型蓮華文瓦当は瓦当面を４等分する界線内の主文様が異なっているだけである。もし、瓦当面を４等分している界線内の蓮華文を巻雲文や文字に置き換えたならば、漢・晋時代に盛行していた瓦当とまったく同じである（図版19-５）。よって、A型蓮華文瓦当は、まさに漢・晋時代の瓦当を手直しすることで生まれたものと言うことができるであろう。隋・唐時代は、蓮華文瓦当が完全に成熟した最盛期であり、この時代の蓮華文瓦当の構図は瓦当面一杯に展開し、文様も複雑である。A型蓮華文瓦当は隋唐代のそれと比べると、文様が簡潔で、かつ単調に見え、両者の差異は明瞭である。こうした大きな差異は、二つの観点から、A型蓮華文瓦当の原型としての特徴を反映しているのである。

Ａ・Ｂ・Ｃ ３型式の蓮華文瓦当の起源を探ると、漢・晋時代の瓦当と密接に関係していることが窺える。さらに、Ａ・Ｂ・Ｃ ３型式の蓮華文瓦当が遂げてきた発展と変遷を追うと、それらは高句麗及び渤海の蓮華文瓦当とも、複雑に入り組んだ繋がりがあることに気がつく。

ここまでＡ・Ｂ・Ｃ ３型式の蓮華文瓦当がもつ基本的な特徴を整理してきた。これらの特徴は、高句麗及び渤海で出土した蓮華文瓦当において継承され、発展した。高句麗出土の蓮華文瓦当[9]には、六弁、八弁、九弁、及び界線があるものやないものなどがあるが、どの蓮華文瓦当にも、高い外縁、高く隆起した単弁の蓮弁、半球状の円形隆起（中房）という三つの基本的な特徴が備わっている。特にその年代が比較的古い高句麗の蓮華文瓦当、例えば千秋墓で出土した六弁蓮華文瓦当は、外縁が比較的高く、単弁は瓦当面から高く隆起しており、蓮弁の間に二重の界線を用い、中房ははっきりと目立つ円形隆起である。こうした造形はA型蓮華文瓦当と極めて似ており、高句麗初期の蓮華文瓦当が、A型瓦当の影響を強く受けたことを示している。

渤海の蓮華文瓦当は、その形状や作りが多様なうえ、特有の民族的色彩を帯びており、Ａ・Ｂ・Ｃ ３型式の蓮華文瓦当や高句麗の蓮華文瓦当との違いは明らかであるが、それらは依然として、高い外縁、瓦当中心の円形隆起の中房、高く隆起した蓮弁という特徴を備えている。渤海上京龍泉府の宮城[10]内で出土した蓮華文瓦当を例に挙げると、外縁の高いものが多く、瓦当面の中心部は円形隆起の中房である。一部の瓦当では、中原や南方地域で盛んになった蓮蓬（蓮の花托状の中房）様式の影響を受けたため、

中房の周囲に蓮子を象徴するいくつかの珠文を加えてはいるものの、瓦当の中心の隆起した円形隆起は終始取って代わられることはなかった(図版19-6)。渤海の蓮華文瓦当を三燕や高句麗の蓮華文瓦当と比べると、その最大の変化は、蓮弁が単弁から複弁になっていることである。しかし、蓮弁が高く隆起し、蓮弁の間に比較的大きな余白を残して隆起した蓮弁を置く従来の手法は、依然として用いられている。このデザイン思想や高く浮き出させる芸術的効果は、三燕や高句麗の蓮華文瓦当と全く一致しており、これら3者の間に、蓮華文瓦当の造形芸術における、脈々と受け継がれた風格が反映されている。一方、中原や南方地域で出土した蓮華文瓦当[11]を見ると、このような高い外縁、高い円形隆起、高く隆起した蓮弁を持つ蓮華文瓦当は、未だかつて発見されたことがない。

以上のような分析を通して、東北地方と中原や南方地域とでは、蓮華文瓦当の変遷過程が全く同じではないことが分かる。中原や南方地域の蓮華文瓦当は、それぞれの変遷を遂げる中で、互いに影響を与えつつ、また融合し、最終的には隋・唐時代における蓮華文瓦当の中心的な造型様式を形成した。一方、東北地方の蓮華文瓦当は、三燕から高句麗を経て渤海に至るまで脈々と受け継がれ、他とは全く異なる発展の道を歩み、最後まで独自の地域的な特色を維持し続け、わが国の古代瓦当芸術における一つの精華となったのである。

註

1　田立坤、万雄飛、白宝玉：「朝陽市老城区発現十六国至遼金元時期重要遺跡」『中国文物報』2004年2月11日。白万田：「遼寧朝陽老城区考古又有重要収穫」『中国文物報』2004年11月12日。

2　銭国祥：「漢魏洛陽城出土瓦当的分期与研究」『考古』1996年第10期。

3　吉林省文物考古研究所等：『集安高句麗王陵』文物出版社、2004年。

4　吉林省文物考古研究所等：『国内城』文物出版社、2004年。

5　吉林省文物考古研究所等：『丸都山城』文物出版社、2004年。

6　註2。

7　田立坤、万雄飛、白宝玉：『朝陽老城北大街内城城門発掘報告』待刊。

8　朝陽北票の金嶺寺建物跡でB型と完全に一致する蓮華文瓦当が出土しているが、この建物跡の年代は定かではない。辛岩、付興勝：「金嶺寺魏晋建築群址為研究三燕文化提供重要線索」『中国文物報』2001年1月31日。

9　林至德、耿鉄華：「集安出土的高句麗瓦当及其年代」『考古』1985年第7期。

10　黒龍江省文物考古研究所等：「渤海国上京龍泉府宮城第二宮殿遺址発掘簡報」『文物』2000年第11期。黒龍江省文物考古研究所等：「黒龍江寧安市渤海上京龍泉府宮城第三宮殿遺址発掘簡報」『考古』2003年第2期。

11　賀雲翱：「南京出土六朝瓦当初探」『東南文化』2003年1期。